

## 審査概要

令和四年度の文部科学大臣賞の選考については、令和三年四月から同四年三月に至る一年間に刊行された俳文学（連歌・俳諧・俳句）に関する著作のうち、学術賞の対象としてとりあげるに足る著作七点を厳選し、選考委員七名による慎重審査の結果、復本一郎著『正岡子規伝 わが心世にしのこらば』（岩波書店、令和三年十二月刊）を最優秀著作として推薦することに決定した。

本書は、古典俳諧、とりわけ芭蕉俳論にすぐれた研究歴を持つ著者が、正岡子規研究へと転じて二十二年を費やし、資料を博搜し、分析した評伝である。伝記とは時間軸に拘泥するあまり、しばしば実像を曖昧にするが、この評伝はその時間軸を超えて自在に資料を引用しつつ、周辺の人物の動向を踏まえて、短歌や俳句の革新に取り組む歌人・俳人としての子規、さらには研究者としての子規像を浮き彫りにしている。

その執筆態度は「杜鵑啼血」（白居易「琵琶行」と題する序文に端的にあらわれている）。

周知の通り、子規という雅号はホトトギスという鳥の名で、時鳥ほか多くの表記を持つが、漢名は杜鵑（とけん）という。序文は日本の詩歌が、夏の到来を告げるホトトギスを（やかましく聞こえても、歌においては偶然聞こえたように、やと鳴いてくれたように、待ちわびた心持ちで詠む）（里村紹巴『連歌至宝抄』）と教えるのに対して、漢学の環境に育った正岡子規は十二歳で「啼血聞くに堪へず」（五言絶句「聞子規」）と詠むほどに漢詩に親しみ、ホトトギスを（血を吐いて鳴く鳥）と理解していた。それで二十代初めに喀血して肺結核と診断された病魔をこの鳥に見立てて雅号とする。すなわち「霸氣あふれる文学者正岡子規」の誕生と説き起こす。

このように古典を視野に置きつつ、子規時代の周辺諸資料に語らせることで、その全体像を浮かび上がらせる姿勢は全編に及ぶ。以下はその一部に過ぎないが、たとえば「第一章 伊予の儒者大原観山の孫」における『明治十二傑』（雑誌『太陽』臨時増刊）という人気投票に、老鼠堂永機と春秋庵幹雄に挟まれて子規が第二位に位置づけられる事実。

「第二章 上京と俳句への起点」において、子規生涯の恩人となる陸羯南（くわかつなん）に子規を紹介した加藤拓川（子規の叔父）が羯南没後のインタビューに「三十年間一日の如く絶えず兄弟の交をしたのは一人」と答える新聞記事。また「第三章 畏友漱石との交流」から「第四章 陸羯南と『新聞日本』」に展開する俳句開眼論。具体的には、子規は蕉門撰

集『猿蓑』を読むことで開眼し、安永・天明期の蕪村や闌更・暁・台・蓼太らを「中興したる（俳人）」と認識してゆくという指摘（この主題は「第七章 蕪村への傾倒」へ展開）。さらに大学を正式退学後に『おくのほそ道』を慕った旅とされる『はて知らずの記』が地方俳諧師訪問が目的であったという洞察。「第五章 ジャーナリスト子規と

「小日本」における坪内逍遙との交流（子規選「文学者十二ヶ月」、『早稲田文学』4<sup>8</sup>所収）をはじめ、古島一雄・

森鷗外・中村不折との接点。「第六章 従軍後の子規と、虚子の献身」における『なじみ集』への言及。総句数四千を超える句を収める本書は日本新聞社への就職が決まったところに編まれた子規自選自筆による百名の交友録的な句集。その存在は知られていたものの行方知れずで、平成二十一年（二〇〇九）に再発見された。さらに、「第八章 歌人子規と伊藤左千夫」にみえる芭蕉の実景・実情の学習。「第九章 『墨汁一滴』と『仰臥漫録』」から「第十章 最期の年と『病牀六尺』」にかけて述べる子規の自殺願望と看護当番の追跡等々である。

編集委員会はこれらを例外なく俎上に載せた上で、本書が復本氏の先行書『余は、交際を好む者なり 正岡子規と十人の俳士』（岩波書店、平成2<sup>1</sup>）、『歌よみ人 正岡子規 病ひに死なじ歌に死ぬとも』（岩波現代全書、平成2<sup>6</sup>）、

『子規紀行文集』（岩波文庫、令和1）等の集大成を意味し、旧派（近世から続く宗匠俳諧）と新派（子規の日本派を含む、明治期に生まれた流派）の対立に矮小化されがちな明治俳壇史、ひいては近代俳句史の再検討に裨益するところは大きいと結論した。

以上の点から、『正岡子規伝 わが心世にしのこらば』を今年度の文部科学大臣賞に最もふさわしい著作として推薦するものである。

令和四年八月十二日

文部科学大臣賞選考委員会

委員長 谷地 快 一